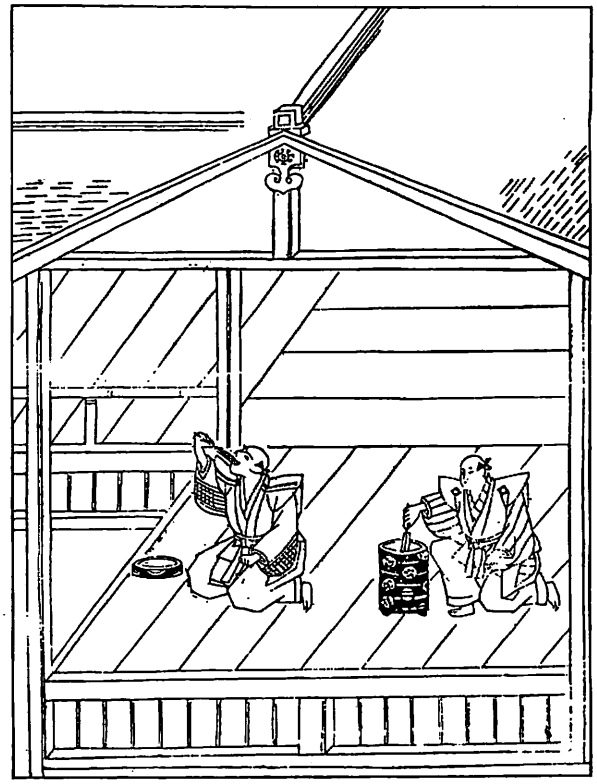
（四）附子

大名「此辺りの大名で御ざる、今日はさる方へ参る、太郎冠者を呼び出し申付る事がある、太郎冠者有か　太郎冠者「はあ　大名「ゐたか　太郎「御前に　大名「念なふ早かつた、次郎冠者も呼べ　太郎「畏て御ざる、次郎冠者、召すは　次郎冠者「心得た、御前に　大名「なんじらを呼び出すは別の事でない、今日はさる方へ行、両人ともに留守をせい　冠者二人「畏て御ざる　大名「それに待て　二人「はあ　大名「やい、此あなたに附子[一四]が有程に、そふ心得[一五]　二人「それならば、両人ともに御供致しませう　大名「そふではない、此あなたに附子と言ふて毒が有、この方から吹く風が当たつてさへ滅[一七]却する程に、そふ心得　二人「畏て御ざる

太郎「やい〳〵[一八]次郎冠者、今日のやうな御留守は有まいぞ　次郎「おふ〳〵、そなたが供に行ば身どもが留守をする、身どもが供に行ばそなたが留守をする、今日のやうな言ひ合[一九]せた留守は有まいぞ、そりやあ[二〇]　太郎「何事じや　次郎「附子の方から風が来た、爰に

一三 大名は葛桶を持って来て、舞台正面前方に置いて言うのであろう。
一四 トリカブトの根を乾燥させて製する毒薬。猛毒として知られる。「附子 ブス〈毒薬也〉」（運歩色葉集）。
一五 「心得い」の略。
一六 「ぶす」を「るす（留守）」と聞き違え、留守番がいるなら、ということ。
一七 ほろびてなくなること。
一八 大名を見送って、二人とも座る。
一九 大名が二人に同じ役を命じたことはいままでなかった、ということ。
二〇 それ。感動詞。事態に驚き、相手に注意をうながす声。「それは」の転じた「そりや」の長音化。「ソリャア」と読む。次郎冠者が立って逃げる。
二一 場所を移し、少し葛桶から離れて、また共に座る。

挿絵　連雀商人と酒売の女が腕相撲するところ。横で目代が見守る。



て話せ

太郎「身どもはあの附子を見やうと思ふ　次郎「やくたいもない事を、をけ　太郎「あの方から吹く風が当たらねば苦しうない、あをいでくれ　次郎「心得た　太郎「あをげ〳〵　次郎「心得た、ぬかるな　太郎「ぬかる事ではない、さあ、紐は解いたぞ、扨蓋を明きよふほどに、あをげ　次郎「心得た　太郎「扨蓋を明けたぞ、身どもはあの附子を見て来う　次郎「一段とよからふ　太郎「やい〳〵、見て来たは　次郎「いかやうな物じや　太郎「何じやは知らぬが、黒い物がどつみりとして有、むまそうな物じやほどに、身どもは食ふてみよふ　次郎「やくたいもない事を、をけ　太郎「身どもは附子に領じられたか、食いたふてならぬ、行て食て来う　次郎「身どもがゐるからは、やる事はならぬ　太郎「名残の袖を振り切りて　附子のそばへぞ歩み行　太郎、附子を食ふ、「むゝ　次郎「やい太郎冠者、何とした　太郎「砂糖じや　次郎「何じや、砂糖じや　太郎「中〳〵　次郎「どれ〳〵　太郎「まづ食ふてみよ　次郎「心得た、むゝ、まことに砂糖

一とんでもない事を言う。「ヤクタイモ・ナイコト」(日葡)。二やめておけ。三問題がない。四二人は扇を広げ、太郎冠者が前に立ち、あおぎながら葛桶に近づく。五油断するな。六「ひも」の交替形。「紐 ヒボ」(文明本)。七「どんみりと」(虎寛本)、「どんどりと」(天理本)とも。動詞「どみる」(続五・七「磁石」に「太刀がどみた様な」)も同源。どろっと。どんよりと。暗・濁・濃・重・鈍などの属性をもつもののさまに言う。八「うまさうな」の異表記。九とりこにされたか。「領ず」は所有する。一〇からには。一一正五・六「花子」にはないが、諸流で男が花子と去りぎわに言ったと謡う、「名残の袖をふりきりて　〳〵　扨いなふずよの」(天理本)の小歌をもじる。これは閑吟集(三八)にもある。太郎冠者は謡いながら、次郎冠者が袖を押さえるのを振り切って葛桶に近づく。一二扇を閉じて箸のように使う。挿絵参照。一三それと思い当たって発する声。一四黒砂糖で、水飴の状態で保存されていたものであろう。砂糖は江戸中期に各地で生産されるようになるまで、貴重品であった。一五「食うて」の転。一六「ちと」の強調形。太郎冠者が多く取って食おうとするのに言う。一七二人は桶を取り合ったりして、夢中になって砂糖を食べ、なくしてしまう。

じゃ　太郎「それを食はすまいと思ふて、附子じゃの毒じゃのとおしやつた」　次郎「なんぢばかり食てよいものか　太郎「それならば、ちとやらふ　次郎「そのやうに取らずとも、ちつと取れ　二人「扨こむまい事かな

太郎「ほゝを、よい事召さつた、頼ふだ御方の、附子じやの毒じやのとおしやつたに、「皆お食やつた」と、頼ふだお方のお帰り被成たらば申上ぐる　次郎「身どもが「をけ」と言ふたに明けた、それがしがまつすぐに申上ぐる　太郎「やい〳〵、これはじやれ事じや、此言ひ分は、あの掛け物を破ればよい　次郎「心得た、さらり〳〵　太郎「よい事召さつた、あれは頼ふだお方の牧谿和尚の墨絵の観音で、御秘蔵被成たものを、あのやうに召さつた、御帰りなされたら、きつと申上ぐる　次郎「「破れ」と言ふたによつて破つた、身どもが申上ぐる　太郎「やい〳〵、これもじやれ事じや　次郎「さて此言ひ分どもは何とするぞ　太郎「この台天目を割れば言ひ分が立つ　次郎「いかな〳〵、また迷惑をさせうで　太郎「身どもも手をかける、そちらを持て　次郎「心得た　太郎「ぐわらり　次郎「ちん　太郎「扨お帰りなされたらば、泣いてゐよ　次郎「泣けばよいか

大名「只今罷帰る、やい〳〵戻つたぞ　二人「泣け〳〵　大名「心許ないが何事じや

太郎「次郎冠者、申上げ　次郎「わどれ、申上さしませ　太郎「お留守を太事と存じて、次郎冠者と相撲を取りましてござれば、次郎冠者は手取りで御ざり、わたくしが小股を取つてこかしますを、こけまいと存て、掛け物に取り付いたれば、あのやうになりました　大

一六「ほほう」。相手の態度に感心したかのようにして言い、以下互いに相手に責任を押しつけようとする。一九なさった。「めさつ」は下二段「めさる」の四段化した「めさり」の促音便形。二〇主人。主人と頼んだお方の意。二一「お食ひやつた」の転。二二正直に。二三「ざれこと」の転。冗談。「ジャレ　ザレと言う方がまさる」(日葡)。二四弁明。二五座敷飾りの掛軸。二六掛軸を破る擬音を口で言う。二七中国、南宋末・元初の画僧。水墨画を描いた。中国ではそれほど知られないが、日本では鎌倉時代末以来珍重され、君台観左右帳記でも最高に格付けされた。伝牧谿画はかなりの数が現存する。続二・五「見物左衛門」でも言う。和泉流も同様に言うが、大蔵・鷺両流では「お掛物」などと言うのみ。二八「ヒサウ　大切にすること」(日葡)。二九厳しく。三〇天目台にのせた天目茶碗。天目茶碗はもと中国の天目山で作られたもので、茶の湯で尊ばれ、座敷飾りにも使われる。三一困らせようとして。三二二人で台を持ち、落とす体をし、擬音を口で言う。三三「わどりよ」の転。三四「大事」の当て字。

挿絵　両冠者が附子を砂糖と知って桶からすくって食べるところ。次郎冠者が蓋に取るらしいが、この演出は現在は見られない。

名「これはいかな事、あれは身どもが秘蔵の観音を、あのやうにしをつた　次郎「返しざに天目の上ゑ投げられまして、あのやうに微塵になりました　大名「これはいかな事、をのれを何としたものであらふぞ　太郎「かやうに太事の御道具を損ないまして、生けておかせられまいと存じて、附子を食べて死のふと存じて、くだされたれども、まだ死にませぬ　大名「をのれら今の間に滅却しよふぞ

太郎〈一口食へどもまだ死なず　次郎〈二口食へども死なれもせず　太郎〈三口四口　次郎〈五口六口　二人〈十口あまりみなになるまで食ふたれども　死なれぬ命めでたさよ　なんぼう　大名「やい、そこなやつ　次郎「はあ　太郎「これは何としたものであらふ　大名「まだをのれはそれにをる　二人「許さつしやれ〈　大名「やるまいぞ〈

一「其取て返しざまに」(虎寛本)。二 砕けて非常にこまかくなること。「微塵 ミヂン」(易林本)。三 生かしては。四 いただいたけれども。五 本曲の典拠となった説話を採った沙石集八・十一「児ノ飴クヒタル事」に「一杯食ドモ不レ死、二三盃マデタベテ候ヘドモ大方不レ死」とあるのに似る。以下、数え歌になっている。六 全部なくなるまで。七「なにほど」の転「なんぼ」を延ばしたもの。和泉流で「なんぼうかしらかたの命や」と続ける。「かしらかた」は「頭堅」で、頑健なこと。この謡を大名が途中でさえぎるので、「なんぼう」までしか記さなかったのであろう。大蔵・鷺両流は「あらかしらかたや(候)」。

▽冠者たちの機転に主人は文句も言えない。和尚と小僧の昔話「飴は毒」に拠ったもののようで、古く沙石集にある他、江戸初期には一休関東咄や一休諸国物語にも載せられて、よく知られた。天正本では、主人と従者でなく、坊主と二人の新発意で、原話の形に近い。八 難儀なことだ。九 川上は奈良県吉野郡川上村。吉野川の上流にある。川上の地蔵は金剛寺の本尊。役行者抛地蔵の伝承がある。地蔵菩薩霊験絵詞に地蔵霊験所として諸流、大事だから眠るまいと思って、などと言う。三五「テトリ 相撲で技の上手な人」(日葡)。